

平成 29 年度

すずかけの家事業計画

まえがき

6月、すずかけの家は10周年目に入る。昨年、昔からの仲間が何人か去った。一方、地元篠原の利用者が増えている。果たして地域に認知されているのだろうか。

宅老所をつくる会からここまできたすずかけの家。日常生活圏域及び北相地域が豊かな福祉・介護の郷として育てているか、私たちはそれに寄与しているのか。原点に立って考える時だといえよう。

小規模多機能の良さを生かす

「通い」「訪問」とも力を入れ、利用者の笑顔がよくみられるようになっている。

が、利用者が増えた分色々なバリエーションが表出した。精神症状を伴う疾患、独居・日中独居への対応・ターミナル期の受止め等、早朝・夜間・休日勤務の見直し等が迫られている。

個人・チームの力量アップ、家族・地元住民などの社会資源とのつながりの強化で小規模多機能の良さである「柔軟さ」「多機能」を培いたい。

地域の拠点化&ネットワーク化に向けて

昨年も、近隣住民や郵便局などの社会資源が、「認知症利用者」へ暖かく対応してくれた。地域のネットワークの大切さを実感させられる。ゆずカフェ・RUN伴（認サポ研修）などを積極的に担い、より深化させたい。

評価事業に取り組む中で難しさを痛感する「（利用者以外の）心配な人」に対しては、市の「高齢者あんしん相談ネット」の窓口として高齢者支援センターとの協力のもと力を入れていく。

また、同じく指摘された「地域防災」や「リスクマネジメント」にも、工夫を凝らして取り組みたい。

10年目として

節目の年として、記念行事を原点に戻る作業としても考えたい。じじばば自由大学の復活などを通し、後期高齢者になっていく市民が、ホンネとしてどんな暮らし方を求めているのかを探ること。小規模多機能のあり方や昨年度の事業計画にのせた「もう一つの家」も、その中で展望していくことができよう。

経営基盤の安定化と労働条件の改善

- 利用者増の恒常化——小規模多機能の良さの発信
- 自己資金の確保蓄積
- 「市事業者連絡会」「県事業者連絡会」等を通し行政への支援要請
- 職員の確保⇒労働条件（給与・健診・職場環境等）改善